

飯盛フミ（三代目）奮闘記

母から娘へ、つぎつぎと白虎隊の墓を守り解説をしつづけて一世紀。

“三代目”故 飯盛フミばっちゃんは「白虎隊の生まれぬ世界」を願って今日も叫ぶ・・・

（アサヒグラフィア 昭和 40 年掲載記事より）

「そうでした。いますよ、いますよ、会津らしいのが。なよ竹精神といわれて、やっと思い出しました……」。

会津若松市のT秘書課長さんが膝をたたいて乗出した。それでもない、これでもたりないと注文をつけて煎じつめた拳句だ。課長さんは机の中をごそごそやって手紙を一通取出した。

市長あて、差出人は東京の著名な会社の重役さん。手紙の内容は～貴地方を旅行の際、たまたま飯盛山の白虎隊の墓にまいり、思いがけず墓前でオバさんの真心のこもった解説をきいたが、帰京すると体が人間が変わったように立派になった。ひとり息子で甘やかして育てたため意志が弱く、学校の先生から非行をたびたび注意されていたのに……とよろこびの礼状だ。

「こんな礼状が年に何通か、こっちにくるんですよ。ええ、もちろん生っ粋の会津人ですよ。飯盛山を持っている飯盛一族ですから……」。

会津の名物女“白虎ばあさん”の家は飯盛山のふもとだ。何年ぶりとかいう大雪で、おとなの腕はどのつららがによっきりぶらさがる玄関に立つと、表札が一枚。赤十字のマークの下に『佩有功章特別社員 飯盛フミ』とある。

通された長押の上に、青貝のナギナタと白虎隊使用？ とみられるヤーゲル式後込銃。床の間の書額は和歌一首。梓弓むかふやさきはしげくとも引きなかへしそ武士の道。詞書には貞吉の出陣するとき詠みてつかわしける 玉章と読める。白虎隊士飯沼貞吉の母の書らしい。いっぽうの壁に『日本赤十字総裁秩父宮妃殿下より金色章拝授の』ばあさんの写真。その下に、「わが妻の積るいさをしあらわれて今日の祝そうれしかるらん 正康」と祝歌を書きつけている。ありゃ、ダンナさんがいたのか、と思わず口に出たとき、ドアがすとあいて「おはいなはんしょ」（いらっしやいませ）

なよたけ堂々たり

ご当人だ。“ばあさん”にはまだ間があるが。なよ竹”にしてはややどっしりしすぎていらっしやる。なよ竹は戊辰戦争（一八六七年）のとき、男たちを城に送ったあと、一族二十一人の女をつれて従容と自刃した藩老西郷頼母の妻千恵子が辞世「なよ竹の風にまかす身ながらもたわまぬ節のありとこそきけ」からとったことばで、会津の女子教育の基となる精神だ。精神をいうのだから、なに太っちょのなよ竹だって恥じることはない。当年五十四歳。割烹着姿だ。

「んだなし、白虎ばあさんといわれますがにえ、わたすは三代目ですよ。先代？ んだなし、わたすのおシュウトさんです。ミヨセといいましたが、二十八年二月に六十六歳でな

くなるときは、朝日新聞に『白虎ばあさんたおれる』と大きく出ましたがにえ……」

「いっちゃんねえが……と先代のナヨタケぷりを話しかけて、ふと「おとうさん、ちょっときてくださいよ」とご主人をよんだ。証人のつもりかもしれん。

終戦直後に、おそれていた占領軍が地元の警察官同道でやってきた。まず白虎隊の墓近くに立つ独伊両国からの顕彰碑の撤去だ。昭和三年イタリアが贈ってくれたボンペイの古代宮殿の石柱がぶっ倒された。このときだ。先代ナヨタケが家人の手を振放って占領軍の前に飛出した。

「オラもいっしょに殺せ。戦争に勝ったものは、こんな墓地まで荒しいとは、どこの国の法律にえ。さあ、白虎隊にケチつけるなら、オラを殺せ。しゃべっちゃいらんに（しゃべってはられない＝問答無用の意）」

怒りと土地なまりに通訳は逃げ出した。MPはおこる。警官はなだめる。業をにやして、指揮官が威嚇射撃を一発。

「よし、跡始末はお前に任せる。だが、これを建てることは許さんぞ」

飯盛家にかくしていた石柱が会津黎明会の協力で再建されたのは昭和二十八年。二代目の死後だ。黎明会の男たちにまじって片棒をかついで墓地へ百七十八段の石段を一步一步のぼりながら、三代目はなんどもつぶやいた。

「おばんちや、あんたの遺志はフミがしっかりになって行きますがにえ」

白虎隊が自刃したのは慶応四年旧八月二十三日。藩主松平容保の恭順がききいれられず、圧倒的優勢をほこる官軍は怒濤のごとく会津城下に追っていた。十五、六歳の少年たちで編成する白虎隊士中二番隊は藩主に願いでて、敵軍ひしめく雨の戸ノ口原に出陣。翌朝一戦ののち敗れて飯盛山にたどりついたのは二十人きり、びしょぬれで空腹と疲れ。南に鶴城を望めば烟煙あがる。城下の民家が燃えていたのを見誤ったわけだ。

「ああ、お城が燃えている。も

はや殿さまもご最期か……父も母も、兄弟たちも」と痛哭涙をのんで、腹を切るもの、のどを突くもの、親友同士で刺違えて死ぬもの、凄絶な最期だ。人命軽視だ、なんていまどきの解釈は当らない。これが当時のサムライのモラルだ。

飯盛山から三^キ。新築された昭和城をみると、まことに小さい。これでは見誤るのが当然だ。白虎隊の遺体は野ざらしのまま翌年四月まで放置された。朝敵”の故だ。たまりかねて名主吉田伊惣次が飯盛山を所有する飯盛正信と謀って、暗夜ひそかになきがらを近くの妙国守に仮埋葬する。

五年後に青森県の南部斗南に移住していた隊上西川勝太郎の遺族が遺骨引取りに訪ねてきた。これがきっかけで、生き残りたちの『会津親友会』ができ、飯盛家は土地三反歩を旧藩主に献納して、白虎隊墓地が新設される。やがて、この土壤に”白虎ばあさん”が育つのに于間ひまはかからない。

白虎ばんちやの百年

正信夫人キンが初代。ときどき訪ねてくる人に”おキンばんちや”は涙を流しながら紹介する。まだ国定教科書にも載っていないし、文部省唱歌もできていない。佐原盛純の名

詩『少年団結ス』がつくられるのはずっと後だ。とにかく、白虎隊を世間の人は知らない。おキンばんちゃ”は自分が見ききしたことを、涙を流しながらしゃべる。真に迫って人の心をうつのは当然だ。

白虎隊の壮烈が明治天皇の玉聞に達すると、遺骨を収集した名主らは表彰され、ばんちゃの解説は”公認証になる。ばんちゃの名調子と気っぴはそのまま嫁のミヨセに引継がれた。名門・飯盛家は昔ながらの大家族制だ。おなじ屋根の下に住んで、長男は世継ぎとして当主なみに大事にされるが、次、三男は冷飯の『部屋住み』扱い。だが、ミヨセは”三代目ばんちゃ”を次男の嫁フミに託した。女傑の素質を見ぬいたからにちがいない。

病弱な正康は「連隊御用達」の写真師になって町に移るが、三脚と暗箱をかついで飛回るのはフミの仕事だ。戦時中ともなれば、夫の国民服にゲートルがけ、営門を歩調をとって出入りするフミが評判になる。撮影から現像、焼付、修整をして仕上げまで、テンテコマイの忙しさにも、毎日”二代目”が待ちかねているお山にかけつける。終戦直後のある日、ミヨセから「お山に戻ってオラの跡継ぎを」と頼まれる。吉川英治が『新日本紀行』の文中で「ミヨセ婆から叱られた」一コマを綴ったのもこのころだ。

毎朝五時半（夏は四時半）に起き、四方八方にカシワ手を打って祈念したあと、墓地にのぼる。まず線香を立ててまわり、花を換え、お水をあげて掃除。やがてお詣りや観光団がやってくる。シーズンには「汽車ポッポでくるお客さんはもちろんですが、長距離バスのお客さんも車掌さんが頼みます、と押しつけるので」三十分おきに名調子を繰返さねばならぬ。声はかすれ「なんどやっても涙が出ますにえ」というから、補給もたいへんだろう。日が暮れると火の用心。墓石ばかりでなく、可燃物もありますからにえ。

「墓地内にペンペン草でもはやしたら申訳ない、とケンケンキョウキョウですがにえ」とおっしゃる。漢学の素養か、”三代目”はときどきむずかしいことばを使う。口癖に「声涙トツトツ」ともいう。声涙ともにくだる名調子だが、訥々ではなさそうだ。

いまでも白虎隊や、なよ竹など戊辰戦争の夢をみるという。一世紀前がこの人には昨日のようになまなましい。”初心”を忘れないからだ。

美声ぞろいの後継者

娘さんばかり四人。四代目のばんちゃは？ ときくと、次女の典子さん（二七）がよばれた。さっそく高杉東行作「君聞カズヤ死シテ忠鬼トナル……」の長詩一編を吟ずる。声といい、態度といい上々。女の子だけにだいいちツヤがある。

「長女の康子は外出中で……長女は声に幅があってもっといいですよ。ええ養子をもらいました。三女恵子、いま高三、こんど武蔵野音大を受けずすが、この娘も。四女良子は高一です。みんな詩吟をやりますよ」と。四代目”にはこと欠かぬ口ぶり。百年三代の真心が通じて、福島県珠井小学校のように、修学旅行に毎年かならず学校花壇でつくった生花を全生徒が持って参拝してくれるところや、毎年奉納剣舞にやってくる水戸東武館、その他「手紙をくれる多くのファン」ができた。最後に「結婚三十年間に二十二年余は寝たり起きたり」の病弱なご主人との夫婦仲は？ とむけると、すったきるなああんた（いやだわよ、この人）と笑いだした。明るい笑声だ。そして壁の祝歌を見上げて、「あの歌みてもわかるでしょ・・・」 信仰は「お天道さんと白虎隊とご先祖さま」 将来の抱

負は「一生白虎隊の墓守り。この世界に二度と白虎隊の悲劇が生れないよう、生きている限り叫びたい……」　いまの若い人は？　「年々よくなって行きますねえ」　電話が鳴った。四十九人目の仲人を引受けて、忙しそうだ。

「また、きてくれなんはんしょ」

と立ちあがる。屋根に五十センチ以上も積った雪のすべり落ちる音。

アサヒグラフ 秋吉記者